

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 5月28日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520540

研究課題名（和文） 多読・多聴による自律的英語学習指導法の研究

研究課題名（英文） Research on Autonomous English Learning Through Extensive Reading and Listening

研究代表者

吉岡 貴芳 (YOSHIOKA TAKAYOSHI)

豊田工業高等専門学校・電気・電子システム工学科・准教授

研究者番号：30270268

研究成果の概要（和文）：

日本人学習者の英語運用能力を顕著に向上させる教育手法として多読・多聴による自律的学習に注目、研究者の勤務校に多読・多聴教材を収集し、複数年継続の授業を実践した。のべ100万語程度の英文読書をした学生は、英語への苦手意識を克服し英語運用能力を顕著に向上させており、多読・多聴が有効な手法であると実証できた。実践上は、授業時間内にコアとなる読書時間を確保し、やさしい英文図書から読み始めることが重要である。

研究成果の概要（英文）：

In this research, we conducted a long-term extensive reading program at Toyota National College of Technology and confirmed the effectiveness especially to Japanese EFL learners. The students, who had read about 1,000,000 English texts, improved their English proficiency dramatically. Securing regular reading time and starting to read from extremely easy-to-read books are the critical factors to success.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育・英語教育

キーワード：多読・多聴、自律的学習

### 1. 研究開始当初の背景

今世紀に入ってわが国で酒井邦秀（電気通信大学）によって提唱された「100万語多読」は、非常に易しい英文から読み始め、従来の多読の概念を覆すほど大量の英文を読むことにより、多くの英語を苦手とする学習

者の学習意欲、英語力向上に画期的な成果が認められ、注目されつつある。小学生から社会人まであらゆるレベルで多読による英語学習の取り組みが始まり、2004年度には日本多読学会が設立された。

本研究代表者、分担者の所属する豊田工業

高等専門学校では、技術者を志す学生の実践的英語運用能力の向上をめざして、英語教育プログラムの改善に取り組む過程で、2003年より「100万語多読」を取り入れ、学内プロジェクト経費等で多読用英文教材を図書館に備え、多読授業の試みを始めている。特に電気・電子システム工学科では、各学科共通一般科目としての英語に加え、専門科目の中に英文多読を行う授業科目を新たに設け、大きな成果をあげつつある。この状況を踏まえ、我が国の英語教育において、長年にわたって関係者の多大な努力にもかかわらず満足な成果をあげていない日本人の英語運用能力の向上に、多読が確かな道筋を開くものと認識するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の全体構想は、日本人の英語運用能力の向上を実現する手段として、非常に易しい英文から読み始め、読む・聴く両面において大量の英語をインプットする英語授業および自律的学習の支援方法を研究・開発し、特に高校生から大学生、社会人にわたる日本人の英語力向上をめざすことである。

そのために、研究代表者、分担者が所属する豊田高専において、高専卒業生に求められる英語運用能力の達成を実現するため、多読・多聴による自律的学習を支援する環境整備を行う。具体的には、

- 1) 多読・多聴教材の開拓・評価、レベル分け
  - 2) 多読・多聴による授業方法と、学生の達成度評価方法の研究
  - 3) 多読用図書データベース、学習記録データベース等のIT利用法の研究
- を行い、他の実践校と情報交換を行うことによって、実践的に、効果的、実行可能な多読授業・多読学習支援方法を研究・開発する。

## 3. 研究の方法

- (1) 現在本校に整備されている英文多読教材に加えて、本校の学生に適したより多様なレベルと内容の多読・多聴教材を充実させる。多読授業において同図書を活用し、必要であればその位置付けを修正する。多読教材に加えて多聴教材を充実させ、試験的に授業においても活用し、学習者の観点から多読教材に準じた教材の評価、レベル分けをする。
- (2) 英語講読の授業、電気・電子システム工学科（以下E科と略称する）専門科目における多読の授業実践を通じて、多読授業の精神と活動内容と矛盾しない試験問題、評価方法の研究開発をする。
- (3) 学習者と指導者が学習記録、多読・多聴用教材の情報を共有できるITを利用したシステムを開発する。

## 4. 研究成果

(1) 豊田高専図書館に、すでに整備されていた約7000冊の多読用図書に加えて、新たに多読授業用図書、多聴用教材および多聴授業用ポータブルCDプレイヤーを追加購入し、授業および課外での多読指導に活用してその状況をモニターし、学習者の観点から多読教材の評価・レベル分けをした。これまでに配備した多読用図書のジャンルと読みやすさを分類体系化した結果を、図書「めざせ1000万語！英語多読完全ブックガイド（改訂第3版）」執筆に反映させた。

(2) これをもとに平成20年度には1年生5学科全員を対象に、また平成21年度には2年生5学科全員を対象に、それぞれ毎週45分の多読・多聴授業を開始した（表1）。

表1 豊田高専の英語多読授業

学年	2010年度(完成)		2009年度(完成)
	全科共通科目(21+4)	電気・電子システム(6)	
専2年	①*総合英語 ①*上級英語表現	① 電気英語コミュニケーション	
専1年	①*総合英語 ①*技術英語	① 電気英語コミュニケーション	
5年	② 英語I ① 英語II	6単位	① 電気技術英語
4年	② 英語講読 ② 科学技術英語		① 電気技術英語
3年	② 英語講読 ② 科学技術英語	多読3単位	① 電気英語基礎
2年	② 英語講読 ② 英語表現		① 電気英語基礎
1年	② 英語講読 ② 文法作文 ② 英会話		

授業時間：①45分×30週 または90分×15週(1単位)  
①\*90分×15週(2単位), ②90分×30週(2単位)

また、E科の多読授業は、各学年1単位の多読授業を専門科目として実施している。2008年度の専攻科1,2年生は、同年度に継続5年目の多読授業を受講している。5年間の授業時間内に読むことのできる最低限の読書量は、毎分80語で計算すると54万語になるが、15人(83%)がこれ以上を読んでおり、また10人(56%)が100万語以上を読んでいる（図1）。

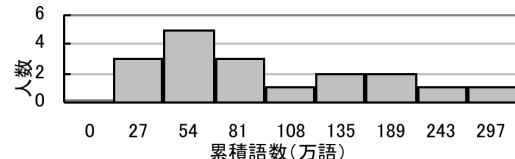


図1 5年目学生の読書量分布(中央値101万語)

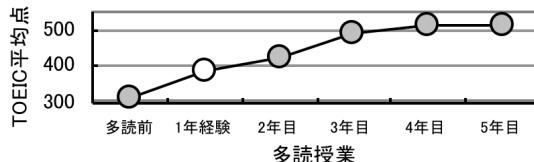


図2 多読継続年数とTOEIC平均点の関係

E科専攻科学生のTOEIC平均点（年間自己ベストの平均、英語圏への留学経験者を除く）を多読授業経験年数でまとめた（図2）。多読授業開始以前の2003年度（専攻科2年生）に対し、多読授業1～3年でTOEIC平均点が徐々に上昇し、4年目以降では平均500点以上である。

次に、読書量の違いによるTOEIC得点の差をみる。2007年度までに4年間多読授業を継続した本科5年生以上の学生のうち、同年度にTOEICを受験した30人の得点（年間自己ベスト）を、読書量（累積語数）で表2に示す3群に分け、比較した（図3）。外国人留学生と英語圏への留学経験者は除いてある。また、比較のために、英語圏への長期留学者の得点分布を付加えた。

表2 4年間多読授業継続学生の群分け

群	読書量（万語）		人数	TOEIC (平均)
	中央値	範囲		
A	31	28～39	9名	435点
B	66	49～82	13名	498点
C	181	107～1,200	8名	604点
英語圏（10ヶ月）留学生*		69名	605点	

\* 2006～2008年度3年生

読書量の最も少ないA群（授業時間内しか読まない）でもTOEIC平均435点と、2008年度の農・理工学系大学4年平均413点並みまで改善されている。

B群では、得点分布が高スコア側にシフトし、13人中12人がTOEIC400点以上である。修了生全員にTOEIC400点を保証したい場合、この程度の読書量が目安になる。さらにC群ではTOEIC平均点604点で、英語圏留学経験者と同水準であり、数百万語の多読による英語運用能力向上の可能性を示している。

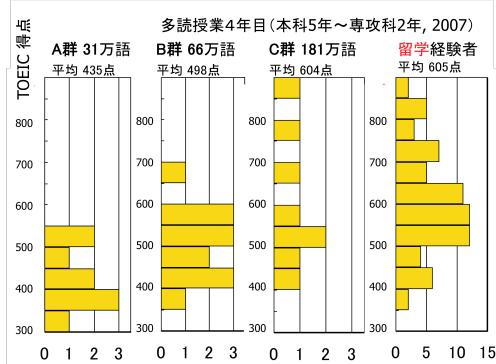


図3 語数別のTOEIC得点分布(4年目)

この多読授業の実施状況を振り返り、実践上のポイントを明らかにするために、詳しい記録の残っている学生6名の読書記録を調査した。過去2年間、4ヶ月毎の読書量（累積語数）とその時期に読んでいた平均英文レベ

ル（YL 読みやすさレベル。1冊に英語が1語も書かれていない絵本：YL0.0から、難解な一般小説：YL9.9まで）の関係を図4に示す。累積語数と平均英文レベルの関係は学生毎に異なるが、大まかにみると、累積50万語でYL2.0、累積100万語ではYL3.0辺りの英文を中心に読んでいることがわかる。図4には無いが、学生は多読授業期間の前半（1～3年目）には、更にやさしい（YL0.0～2.5の）レベルの英文を中心に読んでいることも付記しておく。

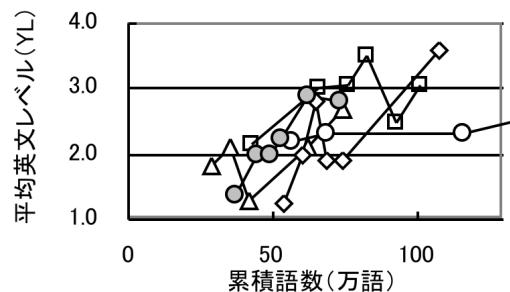


図4 学生の読書履歴(語数と英文レベル)

英文レベル：YL2.0（表3）とは、大部分を基本語彙400～600語で書かれた英文、およそ高校1年の「英語講読」の副読本として使われるやさしい英文レベルである。また、英語圏の小学校1年（～2年の始め）向け読本程度とも言える。

表3 多読用図書の英文レベル

YL	基本語彙	英文の長さ	シリーズ例
1.0	250～300	700～2,000	FRL5, PGR1
2.0	400～600	3,000～7,000	OBW1, PGR2
3.0	1,000	7,600～13,000	MMR3, OBW3, PGR3

すなわち、この多読授業では、学生が極めてやさしい英文図書を5年かけて、延々と読み続けていたことがわかる。

学生の読書履歴は、「すらすら読めるやさしい英文を読むように」という読書指導、TOEICによる外部評価と、未読英文を用いた定期試験の影響を受けている。例えば、2008年度専攻科2年の科目達成度目標の一つは、「基本語1000語水準(YL3.2)の英文を、(毎分100語以上で)連続して1時間以上読み続けることができ、概要を把握することができる」に設定した。定期試験では、YL3.2, 8,000語の未読英文を80分以内に読み、英文回収後に、その概要、やや詳しい内容に答えることを求めている（読書中のメモは禁止）。

次に、100万語達成者30名に、多読紹介時の印象、1年目の様子、効果を実感した時期